

『御裳濯河歌合』 十一番右歌本文小考

夏慶娥

（一）

西行自撰の自歌合『御裳濯河歌合』の十一番に、

左

たちかはる春をしれともみせかほに年をへたつるかすみなりけり

右

岩まどちし氷も今朝はうちとけて昔のしたみつみちもとむらん

（本文は寛文七年版行本による、以下同）

という二首が結番され、判者俊成は右歌を「心調おかし」と評して勝と判定している。

『御裳濯河歌合』伝本は、『国書総目録』を見るだけでも「写本」五十一本・「刊本」十一本ほどが数えられる。現在まで調査することのできた写本・版行本の諸本において、この二首は、三十六番のうちの十一番の左右に歌順を逆行することなく載る。「右」の歌に「勝」と記す本が見られ、伝本間に勝負付の有無の差異がある（本稿は歌の本文を問題とするのであり、勝負付の有無は関わりが認められないので、この相違については触れないことにする）。歌の本文は、伝本間において、引用本文の傍線を施した箇所、本文異同が見られる。

『御裳濯河歌合』の数多い伝本は、寺澤行忠氏のご研究により、大きく四系統に分類され、さらに各系統は二つあるいは三つのグループに分類されている。歌合の奥の記載事項の形態及び本文上の特徴による四系統と各

系統の低位分類である。以下、本文の異同について、寺澤氏の四系統分類に従って、各伝本を示す。十一番右歌の伝本間に見られる本文の性格において、殊に一類本の書陵部蔵正保四年写「五二〇・四九」本と二類本に分類されている写本は、それらの本文の全体の性格と繋がる点があるためである。

稿者の調査し得た『御裳濯河歌合』の伝本は、以下の通りである。上方に、本稿における略号を示す。原典に当たることが叶わない本もあり、下方に写本・複写・翻刻等、稿者が検討した資料の別を注した。

一類本

書甲 書陵部蔵正保四年写「五二〇・四九」本 (写本)

筑 筑波大学附属図書館蔵「ル二二八・三六」本 (写本)

北 北海学園北郷文庫蔵本 (複写)

陽 陽明文庫蔵本 (複写)

内甲 内閣文庫蔵「二〇一・二五五」本 (翻刻・写本)

早甲 早稲田大学図書館蔵「特別・四・五二八三・一〇三」本 (写本)

彰 彰考館蔵「巳・一一・〇七二三」本 (複写)

二類本

東甲 東京大学国文学研究室蔵「中世 一一・一七・二」本 (複写)

中甲 中央大学国文学研究室蔵「K九一・一八・Sa二八」本 (複写)

九 九州大学附属図書館蔵本 (複写)

中乙 中央大学国文学研究室蔵「M九一・一八・Sa二八」本 (複写)

東史 東京大学史料編纂所蔵「押さ・二」本 (写本)

伊 伊藤嘉夫氏蔵延宝三年写本 (影印)

三類本

東乙 東京大学国文学研究室蔵「中世 一一・一七・三」本

- 熊 熊本大学附属図書館蔵永青文庫本 (複製)
 書乙 書陵部蔵「二六五・一一一三」本 (影印)
 書丙 書陵部蔵「二六六・四」本 (写本)
 内乙 内閣文庫蔵「二〇一・二五六」本 (複製・写本)
 内丙 内閣文庫蔵「二〇一・二五二」本 (写本)
 書丁 書陵部蔵「五〇一・五六八」本 (写本)
 書戊 書陵部蔵「一五一・三五九」本 (写本)
 四類本
 書己 書陵部蔵「五〇一・九五」本 (写本)
 早乙 早稲田大学図書館蔵「八四・一七八六」本 (写本)
 宮 宮城県図書館蔵伊達文庫「伊九一・二八・二六」本 (複写)
 寛 寛文七年版行本 (版行)
 群 群書類従(第二百十七卷)所収「御裳濯川歌合」 (版行)

(二)

最初に、十一番左右歌の、管見に入った伝本間における本文の異同状況を見てみると、次の通りである。

まず、左歌は、初句の「たちかへる」を一類本の内甲・彰本が「たちかへる」とする。他の諸本は、表記の差「は」「ハ」「わ」はあるが、異文はなく、陽・書丁・書戊・書己・早乙は「は」「わ」の右に「へい」と異本の本文を校合する。「たちかへる春」でも「たちかへる春」でも意味は通るが、下句に「年をへたつる」とあることから、「立ち返る春」ではなく、「旧年より新年に立ち替わる春」が歌意が通じる。

この左歌は、『山家集』(春・四番)・『西行上人集』(春・三番)・『山家心中集』(雑・一五九番)に載っており、諸集に立春歌として収められ

ている。但し、詞書の本文に異同が見られ、題詠・実詠の扱い方の差がある。歌の本文は『西行上人集』の大東急文庫本が初句を「たちかへる」とする以外は、諸集に異文はない。

このように、左歌の本文異同は、一類本の二本に限って生じた揺れであり、その異文は、同類本及び他類本に校合本文として現れている。歌意から妥当な本文が想定でき、この歌を載せる諸家集の歌の本文も同文と見なしてよい異文である。

『御裳濯河歌合』十一番右歌の伝本間における本文異同は、左歌のそれとは量的にも質的にも相当異なる。

右歌は第二句・第三句・第五句において本文の異同が見られ、伝本間には、次の如く様々な本文の形態が混在する。

冒頭に引用した寛文七年版行本(①岩まとし氷も今朝はうちとけて昔のしたみつみちもとむらん)と、表記の差はあるが、一類本の北本、三類本の内乙・内丙本、四類本の諸本は同文である。四類本のうち、書己・早乙・群本は第三句の右行間に「とけそめい」と異文校合がある。

「とちし」の「し」は直接体験したこととして回想する意を表す過去の助動詞「き」の連体形である。①の歌形によると、詠み手が、「岩間とちし」と回想する「氷」も、「東風解氷」に基づいて、「今朝はうちとけて」と前提し、「昔の下水道もとむらん」と思いやり想像する内容となる。

②岩間とちし氷もけさへとけ初てこけの下水みちもとむらん (筑本による)

一類本の筑本は第二句を「とけ初て」とし、また三類本の書乙・書丙は「解けそめて」とする。(立春の朝は氷も解け始めて)と解氷の過程の開始局面を詠み込む。次に挙げる③④⑤⑥の歌形も、第三句は「解け初めて」

(校訂)である。

③ いはまとし氷もいまハとけ初て苔の下水みちもとむらん

(陽本による)

一類本の陽本が第二・三句を「いまハとけ初て」とし、内甲・彰本が「いまはとけそめて」とする。また三類本の熊本が「いまハとけそめて」、書丁・書戊本が「今ハとけそめて」とする。但し、熊本は第五句の「らん」の右に「なりイ」と異文を校合する。詠み手にとつて、「氷も」「とけ初て」と前提する現在、「苔の下水みちもとむらん」と思いやる現在が、「今朝」―「立春の今日の朝」ではなく「今」―「立春となつた今」となる。

④ 岩間とし氷も今ハとけそめて苔の下水道もとむなり

(東史本による)

二類本の東史本が第二・三句を「今ハとけそめて」、第五句を「なり」とし、中乙本が「いまハとけ初て」「也」とする。また三類本の東乙が「今」とけ初て「なり」とする。③と同様、詠み手にとつての現在は「今」であるが、第五句が伝聞推定の「なり」留めで、現在推量の「らん」の①②③とは異なる。「苔の下水道もとむ」が詠み手の思いやり想像している内容ではなく、推定の内容になる。

⑤ 岩まとし氷もけさハとけ初て苔の下水道もとむ也

(書甲本による)

一類本の書甲本が第三句を「とけ初て」、第五句を「也」とする。二類本の東甲・中甲本が「とけそめて」「也」、九本が「とけそめて」「なり」、伊本が「解初て」「也」とする。④と同様、「苔の下水道求む」が詠み手の推定の内容である。但し、推定する詠み手にとつての現在は、「今」「今朝」と相違する。次に挙げる例のように、伝聞推定の「なり」は音声を根拠に推定する内容の歌が多く、④⑤の歌形は、詠み手が(水の音が聞こえる)

と判断する意を加えての解釈も可能である。¹²⁾

春霞立つやおそきと山川の岩間をくゝる音きこゆなり

(後拾遺集・春上・一三番・和泉式部)

冬すみしふるすは雪にうづもれて谷の鶯春と告ぐなり

(堀河百首・「鶯」・仲美)

因みに、「冬すみし」の歌は、『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究篇』によると、第五句は伝本間に「なり」「らん」の両様の本文が見られる。西行歌に、音声¹³⁾を根拠とする伝聞推定「なり」を用いた例が散見する。『御裳濯河歌合』には『山家集』陽明本・『西行上人集』李花亭本・『山家心中集』妙法院本の歌番号、

つくくとものおもひをればほとゝきす心にあまるこゑきこゆなり

(十四番左)

五月雨のはれ間も見えぬ雲ちより山ほとゝきすなきて過なり

(十六番右、山家一九八番、上人一三九番、心中二四九番)

長月の月のひかりのかけふけてすそのはらにをしかなくなり

(二十番左、聞書八九番)

枯野うつむ雪にこゝろをしたすればあたりのはらに雉子鳴なり

(二十三番右)

津の国の難波のはるはゆめなれやあしのかればにかせわたるなり

(二十九番右、上人四〇七番)

のような例が見られる。「五月雨」の歌は北・内甲本が第五句を「すきけり」とする。「長月の」の歌は書丙本が第五句を「らん」とし、右行間に「なり」と注記する。

⑥ 岩間とし氷も今は解け初て苔の下水道もとむらし

(早甲本による)

一類本の早甲本は、第二・三句は「今は解け初て」と②③と同文であるが、第五句を現在推定の「らし」とし、独自異文を持つ。固淨の『山家集詳解』のこの歌の項を見ると、第五句を「らし」とする本文によっており、「らしの詞にて、音も含めり。」と注する。⑥の歌形は「一応歌意は通るが、詠み手が現在（「今」）の状況を何を根拠に「らし」と推定するのか、その根拠が、文脈上では判然としない。

『御裳濯河歌合』十一番右歌の諸伝本の間での本文異同状況を、系統別に分けて整理すると、一類本に分類されている伝本間に①（北）②（筑）③（陽・内甲・彰）④（書甲）⑤（早甲）と様々な歌形が見られる。一類本は本文の混乱が目立つのである。三類本も、一類本と同様に①（内乙・内丙）②（書乙・書丙）③（熊・書丁・書戊）④（東乙）の歌形が見られ、やはり混乱が生じている類と言えよう。④（中乙・東史）⑤（東甲・中甲・九・伊）と本文が近似する歌形が見られるだけの二類本と①の歌形のみである四類本（書己・早乙・宮・寛・群）は、他類本に対してそれぞれ共通異文を持つ。

①から⑥まで歌形の相違により、当然多様な意味が生じ、歌の設定・趣向が違ってくるが、いずれも歌意の通る本文である。また全体として解氷に託して春の到来を詠んだ本意は変わらない。その点でいずれが本来的ものであるのかは判断し難い。

但し、「東風解氷」に基づいて春の到来を詠んだ類想歌を見てみると、
春の来る夜の間の風のいかなれば今朝吹きにしも氷とくらん

(堀河百首・「立春」・河内、金葉集・春・五番)

打ちなびき春はきにけり山川の岩まの氷けふやとくらむ

(堀河百首・「立春」・顕季、金葉集・春・一番)

氷ぬし志賀のからさきうちとけてさざ浪よする春風ぞふく

(堀河百首・「立春」・国房、詞花集・春・一番)

いはまもる氷のくさびうちとけてけさより春の水ぞ漏り来る

(久安百首・「春」・季通)

のように、立春の「今朝」「今日」、氷が「解く」「打ち解く」と詠むものが多く、第二句を「今朝は」とする①②⑤、第三句を「打ち解て」とする①は、立春水の歌の、常套的な語句を用いての歌形と言えよう。

この右歌は『西行上人集』(春・一番)・『新古今和歌集』(春上・七番)・『玄玉和歌集』(時節歌上・三五一番)・『御裳濯和歌集』(春・五番)に載る。歌の本文に、集単位で異同が見られる。次に、これらにおける十一番右歌の所載本文について、『御裳濯河歌合』の本文と比較しながら、見てみる。

〈三〉

『御裳濯河歌合』十一番の右歌は『西行上人集』に巻頭歌として載る。立春と早春に関わる歌が並ぶ「初春」(但し、一番から十一番までの詞書、伝本によって歌の出入りがある)と題する歌群の一首目の歌である。

- 一 岩間とちし氷も今朝はとけそめて苔の下水みちもとむらん
- 二 ふりつみし高ねのみ雪とけにけり清滝川の水の白浪
- 三 立かはる春をしれとも見せがほに年をへだつる霞なりけり

(本文は『西行全集』所収石川泉立図書館季花亭文庫本による)

『西行上人集』伝本のうち、調査し得た伝本の歌本文を見てみると、諸

本が第二句を「今朝は」（校訂）とする。第三句は、九州大学中央図書館細川文庫本が「うちとけて」と独自異文を持つが、他の諸本は「解け初めて」（校訂）とする。第五句は、伊藤嘉夫氏蔵本・日本大学総合図書館蔵本が、引用本文（李花亭文庫本）と同じく「もとむらん」とするが、他の諸本は「もとむなり」「もとむ也」とする。つまり、『西行上人集』伝本間には、『御裳濯河歌合』諸本の歌形のうち、②と⑤の歌形が見られ、⑤の歌形を取る本が圧倒的に多いのである。

因みに、二番の「ふりつみし」歌は『御裳濯河歌合』十三番右・新古今和歌集』二七番・『玄玉和歌集』七八番・『御裳濯和歌集』三五番等に載る歌で、諸集・諸伝本の歌本文に異文はない。三番（十一番左）の「たちかへる」歌も先述の如く『御裳濯河歌合』とこの歌を載せる諸家集の歌本文は、集単位から見ても、同文と見なしてよい歌である。

西行の自歌合『御裳濯河歌合』『宮河歌合』、『西行上人集』を主な撰歌資料として用いたとされている。『西行和歌歌番号対照表』「第二部 西行自歌合の部」により、自歌合に収められている西行歌について、他歌集における所載状況を見てみると、その多くは家集に載る歌で、特に『西行上人集』との共通歌が最も多く、歌の配列においても自歌合と『西行上人集』が一致する例や隣接する歌が連続して載る例が数例見られる。『西行上人集』が自歌合の撰歌資料であるとされる根拠となる事実である。但し、『西行上人集』が撰歌資料の一つとして自歌合を用いたとされる、逆のケースを想定する見解もあり、両方の先後関係は一定した見解には至っていない。

先に挙げた三首は、一番（十一番・右）・二番（十三番右）・三番（十一番左）と、歌の配列から、『御裳濯河歌合』と『西行上人集』の近似関係が窺えるが、歌の本文に関しては、まず、二番・三番の二首は、先に触れ

たように、調査し得た諸本によれば、同じ歌形が、『御裳濯河歌合』においても『西行上人集』においても、本来的ものと認められる。先後関係は別として、両集が互いに撰歌資料で有り得るという前提から言えば、この二首は、両集にそれぞれ撰歌資料の本文のまま撰出され、あるいは引かれられていることになる。

本稿で問題とする、三番（十一番右）は、『西行上人集』においては、多くの本の本文通り（後に触れる『玄玉和歌集』所載本文が⑤の歌形であることも考慮して）、⑤の歌形が本来的なもので、②の歌形は同集の伝本間における本文の揺れであると判断する。

『御裳濯河歌合』諸本のうち、一類本の書甲本と二類本の東甲・中甲・九・伊本は、『西行上人集』において本来の形であると判断している⑤の歌形を持つ点が注目される。『御裳濯河歌合』伝本の間で様々な歌形が混在するこの一首は、両集間の本文関係において、撰歌資料の歌形を改めて撰出・抄出された可能性も考えられ、他の二首のような簡単な本文関係ではないが、この⑤の歌形は『御裳濯河歌合』において本来の歌形でもあり得るし、または転写過程で『西行上人集』のような歌形に改められた歌形でもあり得る、と言えよう。

（四）

本節では、『玄玉和歌集』『新古今和歌集』『御裳濯和歌集』（成立順）順に、それぞれにおける『御裳濯河歌合』十一番右歌の本文について見てみる。

『玄玉和歌集』の本文は『新編国歌大観 第二巻 私撰集編』所収本（底本、高松宮蔵本）とし、『群書類従第十輯』所収本（底本、群書類従第一四九巻所収「玄玉和歌集」）を参照する。『新古今和歌集』の本文は『新編

国歌大観 第一卷 勅撰集編』所収本（底本、寿本）とし、公刊のある本文と日本古典文学大系『新古今和歌集』（底本、小宮堅次郎氏蔵本）の「校異」を適宜参照する。『御裳濯和歌集』の本文は『新編国歌大観 第六巻 私撰集編二』所収本（底本、天理図書館蔵本）とし、碧沖洞叢書第五十二輯所収本（底本、神宮文庫蔵本）を参照する。

『玄玉和歌集』に「百首歌中に同じ心を」（但し、三五〇番から三五四番までの詞書）と詞書する歌群の中に載る。つまり、「百首歌」の中に「立春」（三四九番の詞書「伊勢の御社に百首歌奉られけるに、立春の心を」）を詠んだ歌として収められている。歌本文は、

岩まどちし水もけさはとけそめて苦の下水道もとむなり
と⑤の歌形を取る。群書類従本も表記の差のみで同文である。

松野陽一氏は、『玄玉集』の撰集資料と関連して、「収載歌の資料となつたものを調査してゆく際に、本集ではぜひ注意しておかなければならぬ点がある」とされ、通常の詞書の表記とは異なる例や他の資料によつて検証できない歌を含む例が屢々見られることを指摘されている。

この場合も、三五〇番が『長秋詠藻』（四八一番）に「右大臣家百首治承二年五月晦日比給題七月追詠進」中の「立春」を題とする歌として、三五三番が『続後撰和歌集』（四番・後徳大寺左大臣）に「後法性寺入道前関白右大臣に侍りける時、家に百首歌よみ侍りけるに、よみつかはしける春のはじめの歌」の詞書の許に載っており、この二首の場合は、「兼定百首」の歌であることが判る。ところが、三五二番は、『実国歌合』『治承三十六人歌合』『玄玉集』成立以前の資料）に見え、『隆信集』（四）に「大納言実国左衛門督と申しし時、歌合せられしに、はるたつ心をよみ侍りし」の詞書で載っている。三五四番は『玄玉集』のみに載る歌である。とする

と、「百首歌」であると立証または否定できる資料のない右歌の場合、「百首歌」から採られたのかどうか、断定することも、否定することもできない。

『玄玉和歌集』は建久二年（一一九一）～三年の成立とされている。この点を考慮すると、現在の資料条件では、まず、文治三年（一一八七）頃の成立とされる『御裳濯河歌合』が依拠資料であり得る。また、『西行上人集』が、自撰他撰・成立事情・成立年次等に関して見解の揺れはあるが、自撰（西行、文治五（一一八九）年没）とする、あるいは自歌合の撰集資料とする見解に従えば、依拠資料であり得る。

『玄玉和歌集』の撰集資料と関連して、松野陽一氏は、自歌合からの入集が多いという点から、「西行の場合は、この歌合からではなく、山家集から採られた可能性もないではないが、配列の面で連続して採られている場合が多い点からみると、まず両歌合からの入集が多いと考えてよいであろう」と指摘される。『西行和歌歌番号対照表』『第四部 私撰集所載歌の部 玄玉和歌集』により、西行歌の所載状況を見てみると、所載歌数四十首のうち、三十七首が西行の自歌合・諸家集に載る歌である。数の点で整理すると、自歌合が三十一首―『御裳濯河歌合』十七首・『宮河歌合』十五首、『西行上人集』が二十九首、『山家集』が十四首、『山家心中集』が十首、『聞書集』が四首、『残集』が一首、の順である。『御裳濯河歌合』一首、『山家集』二首、『西行上人集』一首を除いては、二集以上に共通して見える歌である。また、共通する歌数の最も多い自歌合は、配列において、連続する例が多く、二首連続が五例、四・五首連続が一例ずつある。さらに、例えば『西行和歌歌番号対照表』より例を掲げる。『山家集』陽

明本、『西行上人集』李花本、『山家心中集』妙法院本の歌番号、
玄玉集¹⁶番（御裳⁵番右・山家³⁴番・上人¹⁷⁵番・心中⁶⁰番）
217²番（御裳⁶番右・上人¹⁹番）

のように、家集よりも、自歌合の方が配列の面で近似する例が多い。松野氏の指摘通り「まず両歌合からの入集が多い」と推定される点である。但し、例えば、

玄玉集⁴²⁷番（御裳³番右・山家³³⁴番・上人²⁰⁴番・心中³⁸番）

428番(宮河1番左・山家330番・上人203番・心中37番)

のように、配列の面で、家集の方がより近似する例もあるので、この一首の依拠資料に関しては、『御裳濯河歌合』でも『西行上人集』でもあり得る。つまり、『御裳濯河歌合』一類本の書甲本と二類本の数本に見られる⑤の歌形、または『西行上人集』の多くの本に見られる⑥の歌形が『玄玉和歌集』の所拠本文として考えられる。

ところで、『御裳濯河歌合』二類本の場合、十一番右歌以外にも、他類本に比べて、『玄玉和歌集』に近い歌本文を持つ例が多い。例えば、

身にしみてあはれしらする風よりも月にそあきのいろはありける

(五番右)

は、二類本の中甲・九・中乙・東史・伊本、四類本の群本が第五句を「見えける」(校訂)とし、「みえける」とする『玄玉和歌集』と一致する。

うき身こそいとひなからもあはれなれ月をななめてとしをへにける

(六番右)

は、『玄玉和歌集』が第五句を「年のへにける」とするが、二類本の中甲・九・中乙・東史・伊本、四類本の書己・早乙本が「年のへにける」(校訂)と一致する。因みに、六番の判詞に「月をながめて年のへにけるといひ捨てたる、いますこし勝り侍らん」とあるが、「年をへにける」(校訂)とする本(北・群本)もあるが、多くの本は「年のへにける」(校訂)とする。「年のへにける」が本来の本文であろう。

『新古今和歌集』に、立春に関わる歌が並ぶ中に、「題しらず」(但し、六番から九番までの詞書)として入集しており、歌本文は、

いはまどちし氷もけさはとけそめて昔の下みづ道もとむらん

と②の歌形を取る。現在の資料条件から、『御裳濯河歌合』『西行上人集』が撰歌資料として挙げられる。歌の本文は、『御裳濯河歌合』『西行上人集』

諸本のうち、②の歌形を持つ本文に依ったのか、撰集の際に②の歌形に改められたのかは判らないが、②歌形の『御裳濯河歌合』一類本の筑本・三類本の書乙・書丙、『西行上人集』李花本・伊藤本・日大本のような本文においては、『新古今和歌集』の影響も考えられる。

多くの本が②の歌形であるが、日本古典文学大系『新古今和歌集』(底本、小宮堅次郎氏蔵本)の「校異」によると、大夫本・鷹司本が第二句を「いまは」、慶祐本・鷹司本が第五句を「もとむ也」とするようである。

そして、伝嵯川新右衛門尉親元筆本(新潮日本古典集成『新古今和歌集上』所収)が第五句を「もとむなり」とする。天理図書館蔵鳥丸本(『天理善本叢書 和書之部 第十八卷 新古今和歌集鳥丸本上』所収影印)は「もとむらむ」の右に「なりイ」と異本の本文を校合している。第五句の異同について、近世の古注『新古今口授』に、「道もとむなりと云留りのときは、西行直に見たる景色也。西行の平生の思量にては、道もとむなりと有べきはづとて、中ノ院道村、鳥丸光広、日野広資、飛鳥井雅章、此四匠師の詮議にて決定ス。」という記載が見られる。

『御裳濯和歌集』には、

百首歌の中に(但し、六番までの詞書)

西行法師

いはまどちしほりもけさはとけそめてこけのしたみづ道もとむらんと、詞書に「百首歌」の中に詠んだ歌とする。「百首歌」とするのは『玄玉和歌集』に近く、歌の本文は、②の歌形を持つ『御裳濯河歌合』(筑・書丁・書丙)、『西行上人集』(李花・天文・日大本)の数本と『新古今和歌集』の多くの本と合致する。

〈五〉

『御裳濯河歌合』十一番右歌は、諸伝本の間で様々な歌形が見られる。

それぞれの伝本の本文いづれでも歌意が通る、また歌の本意を離れない範圍での本文変化が生じている。その点でいづれが本来的ものであるか、判断し難い。そこで、十一番右歌を載せる『西行上人集』『玄玉和歌集』『新古今和歌集』『御裳濯和歌集』における歌本文を見てみると、本稿において明らかにした六つの歌形のうち、一類本の書甲本と二類本の東甲・中甲・九・伊本に見られる⑤の歌形、即ち、

岩間とちし氷も今朝は解け初めて昔の下水道もとむなり (校訂)

が、『西行上人集』の多くの本と一致する。この⑤の歌形は、『御裳濯河歌合』として本来の形でも有り得るし、または、転写過程において『西行上人集』のような歌形に改められた歌形でも有り得るのである。しかも、ほぼ同時代に成った『玄玉和歌集』とも一致しており、『御裳濯河歌合』の⑤の歌形は『玄玉和歌集』の所収本文であり得るのである。『御裳濯河歌合』七十二首の西行歌のうち、十一番右歌に限っては、この『西行上人集』と合致する歌形がこの歌の本来的なものであり、『御裳濯河歌合』に、また『玄玉和歌集』に採られた形であると見てよからう。

『御裳濯河歌合』三十六番のうち、十一番においては、左に「たちかはる春をしれとも見せかほに年をへたつる霞なりけり」(校訂)の歌形の立春霞歌、右に「岩間とちし氷も今朝は解け初めて昔の下水道もとむなり」(校訂)の歌形の立春氷歌の結番という本文の形態が、西行が本来に意図したものであることになる。そして、判詞で、判者俊成が「右歌心詞おかし」(中甲・九本「右歌心詞猶おかし」(校訂)、伊本「右の歌心ことにをかし」とする)とするのは、本来は⑤の歌形に対する評価ということになる。

1 「注」補訂版『国書総目録第七巻』『国書総目録第八巻』『補遺』の「御裳濯河歌合」の項。

2 寺澤行忠氏「御裳濯河歌合・宮河歌合伝本考」付・藤田美術館蔵伝西行筆「宮河歌合」翻刻(『慶應義塾大学日吉紀要人文科学』一、昭和六一年三月)
3 久保田淳氏編『西行全集』(日本古典文学会内貴重本刊行会、昭和五十七年五月)
4 「御裳濯河歌合(内閣文庫本)」(翻刻・解題は藤田百合子氏担当)
5 新典社善本叢書3『山家集 御裳濯河歌合 宮河歌合』(昭和五十二年一月、新典社)

6 『細川家永青文庫叢刊8歌合集』(昭和五十九年四月、汲古書院)
7 桑原博史氏編 新典社叢書5『西行全歌集下』(昭和五十七年七月、新典社)
8 久保田氏編『西行全集』(陽明文庫本・松屋本書入六家集本)・桑原氏編 新典社叢書4『西行全歌集上』(筑波大学附属図書館蔵本)の所収本文により調査

9 寺澤氏編 笠間叢書255『山家集の校本と研究』(平成五年三月、笠間書院)「校本篇」陽明文庫本系統・流布本系統のそれぞれの伝本の校異を参照。歌番号は陽明本による。

10 石川県立図書館李花亭文庫本(久保田氏編『西行全集』所収)、東京大学史料編纂所蔵本、九州大学中央図書館細川文庫本(在九州国文資料影印叢書5『山家集』影印)、伊藤嘉夫氏蔵本(新典社善本叢書3『山家集 御裳濯河歌合 宮河歌合』影印)、内閣文庫蔵(二〇一―一五五)本、久保田淳氏蔵(甘藷寺伊長筆本(久保田氏編『西行全集』所収)、日本大学総合図書館蔵本、東奥義塾蔵本、書院部蔵(一五四―一五六)本、書院部蔵(葉一四六八)本、国学院大学図書館蔵本、天理図書館蔵本(『国書影』影印)、共立女子大学図書館蔵本、慶應義塾図書館蔵本、中央大学国文学研究室蔵本、大東急記念文庫蔵本、内閣文庫蔵(二〇一―一五五)本、延宝二年版行本(大井善壽氏編『西行法師家集』(延宝二年版本)所収)、東京大学国文学研究室蔵(中世一―一―一―一)本、上田市立図書館花月文庫蔵本により調査。歌番号は李花亭本による。

11 日本古典文学会編『復刻日本古典文学館』(宮本家本)・久保田氏編『西行全集』(妙法院蔵本・内閣文庫本)・桑原氏編『西行全歌集下』(書院部蔵本)の所収本文により調査。歌番号は妙法院本による。

12 『山家集』(陽明本)「たつはるのあしたよみける」(但し一番から四番までの詞書)、『西行上人集』(李花亭本)「初春」(但し、一番から一番までの詞書)、『山家心中集』(妙法院本)「春 はつはるのあしたに」。

引用は『新編国歌大観 第四巻 私家集編Ⅱ 定数歌編』所収による。
久保田氏校注 新潮日本古典集成『新古今和歌集上』(底本 伝嵯川新右衛門尉親元筆本) 歌本文「岩間とちし氷もけさはとけそめて昔のしたみづ道もとむ

なり」・「解釈「岩間をどさしていた水も、立春の今朝は解け始めて、苔の下を潜

つて流れる水が、道筋を捜し求めているようだなあ。水の音が聞えるよ。」

橋本不美男氏・滝沢貞夫氏著『校本堀河院御時百首和歌とその研究本文研究篇』

(笠間書院、昭和五一年) 五五番「らん」(葉初玄)

梅沢和軒校訂『山家集詳解』(明治四四年一月、武藏屋書店)平成四年七月復刻

版、バルトス社)

寺澤氏(『御裳濯河歌合・宮河歌合伝本考』)は「二類本は、奥書の類を有たず、

最も古い形態を存している筈であるが、殊にAに於いては、かなり早い段階で

本文に乱れが生じていること、(略)」と指摘される。※A-1調査し得た伝本の

うち、書甲を除く一類本の諸本がAグループに当たるとする。

歌の引用は『新編国歌大観 第四卷 私家集編Ⅱ定数歌編』所収による。

注 8

犬井善壽氏編著『西行和歌歌番号対照表』(昭和六三年二月、私家版)―底本

『群書類従第十三輯』所収「御裳濯河歌合」

「二つの西行自歌合の入集歌が、集中的に、しかも多くの場合、ほぼ歌合に於

ける排列通りに現れているのである。例を掲げる。(略)二つの自歌合も『西行

上人集』編纂の重要資料の一つとなっていることは明らかであろう。(略)『山

家心中集』という基礎資料に加えて、『御裳濯河歌合』『宮河歌合』という西行

の二つの自歌合が、資料として用いられており、その結果、屢々重出歌を生じ

たこと」(寺澤氏「西行上人集伝本考」『経済学部日吉論文集35』昭和六〇年三

月)

松野陽一氏「玄玉和歌集考」(『立正学園女子短大紀要』昭和四十五年二月)

注 21

犬井氏編著『西行和歌歌番号対照表』―底本『新編国歌大観 第二卷 私撰集』

所収「玄玉和歌集」(底本、高松宮蔵本)

新古今集古注集成の会編『新古今集古注集成 近世古注編 4』『新古今口授』―

早稲田大学図書館本、兼築信行氏校(平成一三年二月、笠間書院)

(ハ) キョニア 筑波大学大学院 文芸・言語研究科 学生)